

園山かりん

8

逆ページ版

夏休みがいっぱい





ここは最後のページです。
ページ順を逆に並べてありますので、
反対側のページからお読み下さい。

第十四話

その一へつづく…



みんな、お葬式みたいな顔して」

と、Cコード調の乗りで、Eフラット・メジャー調の雰囲気を、一気に崩壊させた。



渡して下さい、つて言つて、行つちやつた…」

肩を落としながら、私はノートの表紙をめくり、1ページ目の『OK』の文字を見せた。筆跡が私のものだと、由美と光子はすぐに気がついた。二人は言葉に詰まり、私の代わりにため息をこぼした。Eフラット・メジャーのメロディが、突然、頭の中で流れ出した。次第に『OK』が揺れて見えてくる。何かしやべろうとしても、心に、切なさがじわじわとしみ出してくるようで、適當な言葉が見つからない。哀愁が漂うような沈黙が続き、數十秒が何分にも感じる。やがて、

「返事を渡す前に、夏休みが繰り返すことになつたわけね」

と、由美が哀れみ、

「せっかく、両想いなのに…」

と、光子が残念がつた。「私は大丈夫。心配ないよ」、笑顔で口に出そうとした。だけど、どうしても口が開かない。言葉をこぼすと、涙までこぼれそうな気がした。そんな私を察して、二人はいたわるように、そつと私の肩に触れた。すると、絶妙な間の悪さで母が登場し、

「特製冷やしホットケーキ、おまたせー！ …あれ？ どうしたの？」

「私が練習を見ていたのを、ずっと気になっていたって。だから、良かつたら、交換ノート、お願ひしますつて、このノートを差し出しながら言われたの」

光子は拳に入れてうなづき、

「で、もちろん、オーケーしたんでしょ？」

と、由美は期待に満ち溢れた顔で聞いた。でも、

「…ううん」

私の反応に、

「えーっ！？」

二人は悲鳴に近い声を上げてしまつた。

「私も、どうしてすぐに『はい』って言えなかつたのか、解らないの。本当は言いたかつたのに、案山子みたいに突つ立つたまま、何も言えなくつて。突然のことで、たぶん動搖していたんだと思う」

「それで？」

「どうなつたの？」

「すぐに返事しなくてもいいから、一学期が始まつたら、このノートに返事を書いて

見られる嬉しさで、起きてから、ずっとドキドキしていた。そしたら、先輩のほうから電話がかかつてきた。

「きやー！」

由美が歎声を上げ、

「どんな気持ちだつた？ 先輩から呼び出しをもらつた時」

光子が嬉しそうに聞いた。

「そりゃあ嬉しかつたわよ。でも…、正直に言えば、その時はまだ、期待よりも不安のほうが大きかつたの。いつたい、何を言われるんだろうって」

「やっぱりそうよねえ…。で、それから？ それから、どうなつたの？」

光子が急かした。

「試合が終わつてから、講堂の裏に行つたの。そしたら、先輩、これを持つて、待つてた」

私は、由美と光子の真ん中にノートを置いた。二人は顔を寄せ、表紙に見入つた。

「それで？」

今度は由美が急かした。

私は絶対ダメだと首を縦に振らなかつた。自信が無かつた。失恋するくらいなら、そのまゝのほうが良かつた。そんな私を見兼ね、美香子が田霜先生に掛け合つてくれた。卒業アルバム用だからつて嘘ついて、先輩の写真を撮つてもらつた。夏休みに入る直前、野球部員として、先輩が後輩たちに最後の挨拶をした日だつた。

夏休みに入つてから、剛史率いる、新生野球部の練習がスタートした。だけど、私たちの見学は無くなつた。もう私には、見学する理由も無かつたし、隣村の美香子は、私に気遣つて、夏休みくらいは家でゆつくりすると言つた。

その後、切なさはあつたものの、田霜先生にもらつた写真のおかげで、だいぶ癒された。部屋にいる時、遠く離れたグラウンドから、バットでボールを叩く音が響くことがあつた。そんな時は、先輩の写真を見ながら、練習見物の時を思い出していた。収まる写真立てが無かつたから、好きなレコードに挟んで、音楽を聞きながら、思い出に浸ることもあつた。そんな日々を過ごし、夏休みも終わろうとする頃、美香子から連絡があつた。「剛史から聞いたんだけど、明日、野球部の練習試合があるんだつて。三年生や他の部活の助つ人たちが加わつて、試合するらしいの。もちろん、吉澤先輩も参加するつて！」

そんなわけで、美香子と見物に行くことになつた。当日は、久しぶりに先輩の姿が

私も告白したいと思つた。だけど、私の恋には変化がなかつた。天秤が次第に傾くように、想いばかりが募つていつた。告白なんてできやしない。相手は取り巻きがいる人気者。たとえ告白しても、年下の私が相手にされるわけがない。小学生の時、一度だけ、差出人不明のラブレターらしきものをもらつたことがあるものの、私は決して男子にモテるような『可愛い女子』ではない。

二年になつても状況は同じだつた。やがて、片想いでも先輩の練習する姿を見られるだけで、幸いなのかもしれない。そう思うようになつた。石段に座つて、静かに先輩の姿を追う。それだけで、幸せな気分になれるようになつた。この時間がずっと続いてほしいと思つていた。だけど、長くは続かなかつた。二年の一学期の後半に差し掛かつた頃、岩柿中学校野球部が、中体連の予選二回戦であっけなく負けてしまつたのを最後に、先輩は放課後のグラウンドから姿を消した。その気になれば、姿はいくらでも見られるのに、三年A組の教室をのぞく勇気は、私にはなかつた。先輩の欠けた野球部の練習を見物するたびに、私は消沈し、ため息ばかりつくようになつた。

さすがに美香子が気がついた。「なんでもつと早く言つてくれないのよ！」と、美香子に怒られた。美香子は、思いきつて告白しちゃえと言つた。だけど、

「でも？」

「された」

「…されたつて、吉澤先輩のほうから、告白されたのつ？」

光子が思わず声を上げた。

「うん…」

結局、二人に急かされ、なにもかも全て白状する羽目になつた。

それは、夏休みが繰り返すようになる、前日の朝のことだつた。「今日の午後に、講堂の裏まで来てくれませんか」吉澤先輩からの突然の電話だつた。信じられなかつた。それまでは、一方的な恋だと思つていた。

一年の二学期、初めて先輩と会話したあの日から、私は吉澤先輩に恋をした。友達の美香子の、西川剛史目当ての練習見物に付き合うふりをして、ほとんど毎日のように、先輩の姿を追つていた。美香子の恋を邪魔しちゃいそうで、胸の内は誰にも話さなかつた。やがて美香子は剛史に告白し、付き合うようになつた。それまで控えめにしていた美香子は、堂々と剛史を応援するようになつた。そんな美香子が羨ましかつた。できるなら、

由美が、さらにニヤけて言った。

「そうそう。三年女子の取り巻きが怖くって、結局、実現できなかつたんだよね」

光子は、わざと大げさにため息をついた。人気があるのは、三年生だけかと思つていた。
吉澤先輩、一年にも人気があつたんだな。知らなかつた。

「ねえ、シーコさん…」

由美が、なぜか声を潜めた。

「え？」

「もう、したの？」

「えっ！！！ な、なな、何を？」

心臓が飛び出しそうになつた。由美、あんたはいつたい、何を言い出すの！ と、あた
ふたしていたら、

「こ・く・は・く」

わざと意地悪な顔つきで言つた。キス以上のことと言つているのかと勘違いして、妙な
汗が額ににじんだ。

「し、してないけど…、でも…」

「吉澤先輩のこと…」

光子は、自分の頬に手をあてた。

「…」

どんな言い訳も通じない。だけど、二人に隠さなければいけない理由も無い。深く息を吸い、両手を背中に回したまま、私は素直にうなずいた。

「知つてたの？」

照れながら、二人に聞いた。顔の火照りが、すーっと退いていく。正直に白状したら、だいぶ気が楽になつた。

「だつて、ねえ光子。ふふふ」

「シーコさんの指定席、イニシャル付きなんだもの。必ずそれ、確認してから座るでしょ」二人の顔がニヤけた。ば、ばれていたのか。さつきとは、違う意味で恥ずかしい。

「SYつていつたら、吉澤真吾先輩しかいないもん」

自信たっぷりに、光子は腕を組んだ。

「先輩のこと、知つてるの？」

「だつて、有名だもん。クラスに、ファンクラブを作ろうっていう子もいたくらいだし」

「これ、シーコさんのお気に入りって言つてたアルバムね！」

と、由美が風のファーストアルバムを取り出した時だつた。同時に、レコードの間から薄いグリーンのノートが飛び出した。

「あ…」

急いで拾おうとしたけど遅かつた。飛び出した拍子に、挟んでいた吉澤先輩の写真が、彼女たちの前にこぼれた。机の引き出しに仕舞つたと思つていた。一昨日、表紙越しにキスしようとしたところをれんげに目撃され、慌てて、レコードの間にノートを突っ込んだままになっていた。すっかり忘れていた。

由美と光子が顔を見合させた。一瞬、時が止まつたように感じた。すぐに我に返り、目にも留らぬ速さで、ノートと写真を拾い、背中に隠した。

「な、何でもないの！」

恥ずかしさで、顔がみるみる熱くなつていく。何でもないわけがない。きっと真つ赤な顔に、そう書いてある。

「シーコさん、やつぱり！」

由美の目が点になつた。

由美は感心しながら、ジャケットを裏返した。

「じゃあ、これは？ 私、まだ聞いたこと無い！」

と、今度は光子が『今はまだ人生を語らず』を手に取つた。私が買つた数少ない一枚だ。
「たくろうのアルバムね。『人生を語らず』とか『シンシア』とか『襟裳岬』とか、良い曲が多いよ』

「えっ？ 『襟裳岬』って、レコード大賞の？」

「そう、その『襟裳岬』」

「なんで？ なんで、たくろうが演歌唄つてるの？」

「だって、たくろうが作曲したんだもの」

「えーっ！ そうなの！ 知らなかつた…」

光子は驚き、ジャケットの帯を見ながら、

「さすがフォークソング部部長のシーコさん、何でも知つているのね！」

と、よいしょした。あはは、たくろうが作曲したつていうのは有名なのに。それより、
いつの間に私は部長になつたの。：なんて、のんきに構えて苦笑いしたら、とんでもない事態が起きました。

二人は、予定より少し遅れて到着した。途中で、散歩中の元ジイに声をかけられ、習字のお題の話に付き合っていたらしい。

「わあ！ 何枚あるの？」

「すごーい！ 見ていい？」

カラー ボックスの前にしゃがみ、由美と光子が声を上げた。

「五十枚くらい。もちろん、遠慮なく全部見てちょうだい」

「じゃあこれ、どんなアルバム？ 見たこと無いけど…」

由美が『GARO 2』を引き出した。

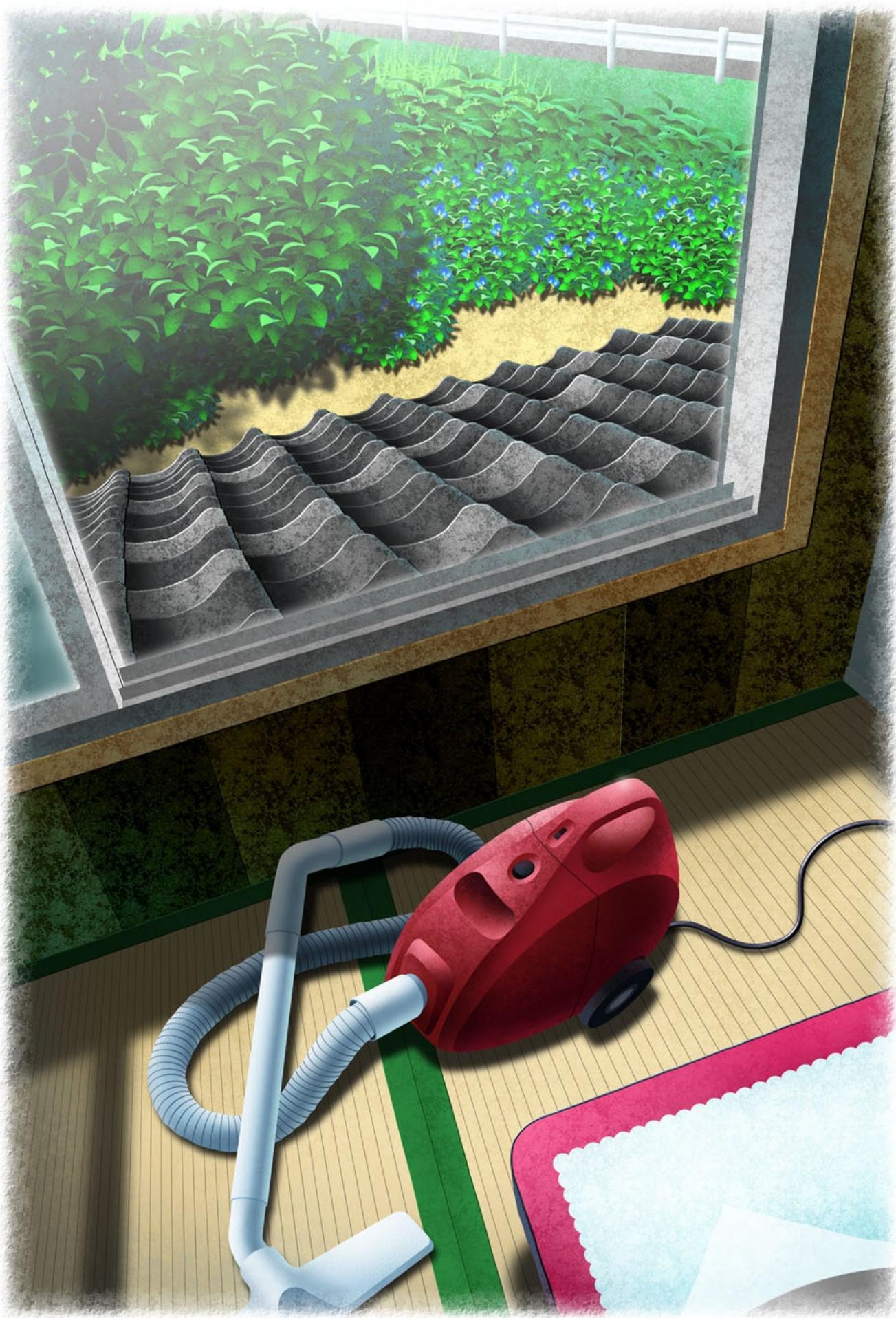
「ほら、『学生街の喫茶店』って、聞いたことがあるでしょ」

すかさず、私が解説を入れる。

「うんうん、きーみとよつくうー、つて曲ね」

「そう、そのグループのセカンドアルバム。ガロっていう三人組みのグループなの。もちろん『学生街の喫茶店』も入っているわよ。A面はガロの曲で、B面はビートルズなんかのカバー曲が入ってるの」

「へー、そなんだ！」



「何だつたの？」

「由美と光子、今から遊びに来るつて」

「あら、珍しいじやない。由美ちゃんとみつちゃんが遊びに来るなんて」

「うん。…ねえ、お母さん、お茶菓子になるようなもの、何かある？」

「そうねえ…、ビスコは？」

「それ、れんげのおやつでしょに。子どもじやないんだから」

「おほほ、やつぱりそうよね。…あ、ホットケーキだつたら用意できるわよ。今のうちに作つて、冷やしておこうか」

「ほんと？ ジゃあ、お願ひ！ その代わり晩ご飯の後片付け、全部引き受けちゃうから」「まつたく。こんな時だけ調子いいんだから」

母は苦笑いしながら呟いた。

二人が前に遊びに来たのつて、まだ二階の部屋を改築する前、私が幼稚園の時以来だ。

由美と光子が、電話でおしゃべりをしているうちに、私のところへ、レコードを見せてもらひに行こう、ということになつたらしい。ショッちゅう顔は会わせているのに、なんか、新鮮な感じがする。私は大急ぎで二階へ上がり、部屋を片付け始めた。

Eフラット・メジャーで埋めて、試しに弾いてみようということになつた。そしたら、見事に音が合つた。

Gマイナー、F、Eフラット・メジャー、Gマイナー、今度は通して挑戦。

「タンタタタタタン、タンタタタタタン、タンタタタタタタン、タンタタタタタン」

拍子を取りながら、同じテンポで軽快に弾いていく。このところメキメキと上達してきただ。まだわずかに音がかされるところがあるけれど、一週間前とは比べものにならないほどの進歩。光子は、同じコード進行をゆつたりとしたストロークで弾くことになつていてから、合わせて演奏したら、それなりに様になりそうだ。昨日は演奏無しで唄つてみせてくれた由美のボーカルも、とてもいい感じだつたし、次の部活が楽しみ。と、わくわくしてたら、下から母の声が響いた。

「椎子、電話よー。由美ちゃんからー」

意思が届いたかのような絶妙なタイミング。近頃、由美はとても間がいい。

「じゃあ、待つてるから」

電話を切りると、母が台所から顔を出した。

人差し指で3フレットの1、2、3弦を、中指で4フレットの2弦を、薬指で5フレットの4弦を、小指で6フレットの5弦を押さえ、スリーフィンガーでゆっくりと奏でる。今までで、一番悲しげな音が出る。8小節分ほど繰り返したあと、次にテンポを上げて弾いてみる。なかなか良い感じ。

昨日の部活で、唯一解つていなかつたコードが判明した。ギターコード集を眺めていた由美が、

「シーコさん、これつて、イー・フラットつて読むの？」
と、指差したコードがきつかけだつた。

「うん、そう。正確には、メジャーが付くんだつて。Eフラット・メジャー。清行兄さんが言つてた」

「このコード、もう弾いてみた？」

「ううん、まだ」

私が光子に首を振ると、

「『さようなら』のコード、これだつたりして」

由美が冗談を言つて笑つた。で、せつかくだから、コード進行の空きを

第十三話

哀愁の旋律を崩壊させる。

八月八日



イラスト SAKOYAN

「こんなんでいちいち大騒ぎしないの！」

つて怒られるし、れんげには、

「シーコ姉ちゃんの、弱虫」

と、またしても蔑まれてしまった。

一週間前、もちこし川上流で、

糸とんぼたちに与えられた

『なんか良いことがありそうな気配』

は、どつかへ飛んで行ってしまった。



「そんなでつかい蜘蛛、い、いるわけないだろーっ！ クツ」

涙目で、和則は必死に笑いをこらえてる。

「本当なんだつてば！ タランチュラかと思つたもん！」

咄嗟に出たとはいえ、何とみつともない言い訳。恥ずかしい。穴があつたら入りたい。れんげを生け贅にしたバチがあたつてしまつた。

「まあとにかく、大したことないようだな」

高井和先生は、何事もなかつたように締めくくつた。おでこの傷は、次の夏休みには消える。だけど、その経緯は『タランチュラ激突事件』などと、適当なタイトルを付けられて、口達者な和則によつて、この先、ずっと語り継がれていくだろう。：ああ、なんて歯痒い。しかし、実は素つ裸で壁に激突した、つてことがバレなかつたのは、不幸中の幸いだつた。

昨夜、私の悲鳴を聞いて真つ先に駆けつけた父だが、天井の大蜘蛛を見るなり、

「か、母さん！ 追つ払つて！」

素つ裸でうずくまつていた私のことはほつといて、慌てて居間に逃げていつた。はたきでささつと蜘蛛を追い払つた母からは、

「えつ？」

「お前の妹が、今朝のラジオ体操の時、言つてたぞ。ゆうべ、姉ちゃんが大きな蜘蛛見て、慌てて壁に激突して、頭、怪我したつて」

「あつ、わつ！」

バレてしまつた。こんなことなら、私もラジオ体操に出て、れんげのおしゃべりを阻止するんだつた。私はすっかり動搖して、無意識のうちに、ペンギンの羽みたいに両手をパタパタと動かしていた。

「あーつ、やつぱりあの悲鳴はシーコだつたか！」

「蜘蛛見て、びびつて、大声出したつてわけか！」

和則と元信が、わざと大袈裟に驚いた。ううつ、バレてしまつては仕方がない。ここは開き直るしかない。

「だつて、こーんなに大きい蜘蛛だつたんだよ！」

そのつもりはなかつたが、手を広げ、実際よりも一回り大きく誇張してしまつた。私、ムカデ話のれんげと、同じことを言つてゐる。なんだかんだいつても、やつぱり姉妹だな。…なんて、納得している場合じやない。

うつ、私の悲鳴、大袈裟ではなかつた。

「ああ、あれねええ！」

「そういえば、俺も聞こえた！」

元信が話に加わつた。いけない。この話題がこれ以上大きくなつては困る。本当は、脱衣場で大きな蜘蛛を見て悲鳴を上げ、慌てて逃げようとして、壁におでこを思いつきりぶつけたなんて、口が裂けても言えない。

「な、何でも無いのよ。れんげが…、寝ぼけちゃつてさ、あはは…」

「…？」

なんとか誤魔化そうとするが、かえつて私の不自然な態度が目立ち、和則に不信感を与えてしまつた。れんげ、あんたのことを受け贅にしてしまつた私を、許してちょうだい！

「起立！」

三年の博己先輩が号令をかけた。良かった！ タイミングよく、高井和先生が登場してくれた。と、安心したのもつかの間、

「椎子、タベは大変だつたつてなあ。大丈夫か？」

着席したとたん、先生が自分のおでこを、指でちょっと突きながら言つた。

いつもより、ちょっとゆっくりしすぎたから、学校まで走るはめになつた。十時五分前に到着。今日は私が一番最後の登校になつてしまつた。

「あれ？ シーコさん、おでこ、どうしたの？」

光子が私のおでこの絆創膏を指差した。前髪で隠したつもりだつたけど、やつぱり目立つか。

「ちょっと、ふきでものが出来ちゃつて」

「夜更かしでもしたの？」

由美が心配そうに首をかしげた。

「う、うん。それもあるけど、たぶん、何かにかぶれちゃつたのかも。でも、大したことないから。あはは……」

わずかに笑いが引きつった。

「シーコ！」

和則が、珍しく声をかけてきた。いつも私たちのおしゃべりには無関心で、先生が入つてくるまで居眠りしているのに。

「昨日の夜、お前の家のほうから凄い声が聞こえてきたけど、何かあつたのか？」



ことはない。私は何度も行つたことがあるけれど、このところご無沙汰している。おまけに今日は二回目の登校日。朝ごはんも済ませていないし、登校の準備もしていない。

「うーん…バス」

克子姉さんも参加するなんなら、久しぶりに行つてみようかと、一瞬思つたけれど、夜更かしのせいで、眠気が気力を封じ込めてしまつた。

「そう。じゃあ、行つてくるね」

れんげは、私が参加するとは、はなつから思つていらない。

「はいはい、いつてらつ…ふあーい」

私はいつも、起きたてはだらしない。

一階から声を上げて、れんげはさらに急かす。やれやれ、とため息をつきながら階段を下りた。

「はい、どうぞ。私が聞いていた時には、イルカっていう女の人だつたから、あのねのね、たぶん入っていないとと思うよ。期待しないでね」

「うん、ありがとう！」

「どういたしまして」

「へへえ、みんなといっしょに、広場で聞くことになつてるんだ」

「みんなと？」

「体操終わつてから、昨日の虫探しのグループで聞くんだよ！」

「ふーん。じゃあ、克子姉さんも参加するの？」

「うん、来るつて言つてたよ。シーコ姉ちゃんも来る？」

「うーん…」

小学校と中学校の間の大グラウンドで、以前は毎日やつていたラジオ体操は、登校日が五回に設定されてから、お盆の週を除く、火曜日と木曜日の週二回になつた。小学生以外は誰でも自由に参加していくことになつていて、大半の住民たちは、ほとんど参加する

タイミングよく、外でパンパンと洗濯物のシワをのばす音がした。

「ねえねえ、それよりシーコ姉ちゃん！」

「あ、テープ？」

れんげは大きく一回うなずいた。

「ちゃんと録音しといたわよ」

「あのねのね、やつてた？」

「分かんない。始まつてから十分くらいは聞いてたけど、途中で寝ちゃつたから。後で聞いてみて」

「今ちょうどいい！」

「今って、あんた、これからラジオ体操でしょ」

「いいから、早く！」

急かされ、私は渋々と二階に上がつた。ラジカセからテープを取り出す。最後まで巻ききつている。どうやらちゃんと録音されているようだ。しかし、起きている時には、時間差電波現象はなかつたから、あのねのねの声が入っている可能性は、極めて低い。

「シーコ姉ちゃん、早く早く！」

「シーコ姉ちゃん、大丈夫？」

寝ぼけまなこで降りてきた私に、れんげが自分のおでこを指で突つつきながら、

「昨日は、大騒ぎだつたもんねえ。へつへつへ」

と、嫌味つたらしく笑つた。

「ば、ばーか。ちょっと驚いただけでしょ。それより、あんた、ずいぶん早いじゃないの」
いつもだつたら時間ギリギリまで寝ているのに、しかも、昨夜は遅くまで起きていたれ
んげが、朝ごはんをとつぐに済ませ、台所のテーブルで一息ついている。

「まあね。さすがにお父さんの早起きには、かなわないけどさ」

反り返るような態度で椅子に座る様子が、いかにも鼻につく。

「なーに言つてんの。で、私のことはほつたらかしにして逃げてつた、そのお父さんは？」
今度は私が嫌味つたらしく言つた。いつもなら、この時間はまだ家にいるはずの、父の
姿が見えない。

「早めに仕事だつて」

「やつぱり逃げたか。まつたく。：お母さんは？」

「庭」

薄霧に包まれた銀色の草原で、私はひとり、佇んでいる。ふと、小指に赤い糸が結ばれているのに気がついた。糸が続く向こうから、先輩の声が聞こえてくる。胸が高鳴り、私は赤い糸を辿つて霧の奥に進んだ。近づくはずの先輩の声が、なぜか、どんなに進んでも、いつこうに近づかない。霧は次第に濃くなり、渦を作つて体にまとわりつく。行く手を塞ぐ。押しつぶされそうな不安を感じ、たまらず、先輩の名前を大声で叫んだ。突然、れんげの笑い声が響きわたり、霧はたちまち晴れた。目の前で、れんげと父と母、おまけに透さんまでもが、赤い糸で出来た蜘蛛の巣に引っかかつて、笑っていた。やがて、透さんはコンパクトミラーを差し出し、覗いてみるようになつた。私は不吉な予感がして、覗くのをためらつた。れんげが「弱虫」と蔑み、みんなは覗けと囁き立てた。しかたなく、コンパクトミラーを受け取ると、恐る恐る覗いた。

「わっ！」

腰が抜けるほど驚いた。鏡に映つていたのは、シワシワの、年老いた私の顔だつた。

飛び起きた。寝汗をぐつしょりかいでいる。たぶん、相当うなされたんだろう。おかげで、目覚ましのベルが鳴る前に目覚めてしまつた。夢で良かつたと深く息を吐く。とたんに、疲労感がどつと押し寄せた。

第十二話

れんげを生け贅にした罰があつた。

八月七日



イラスト SAKOYAN

園山かりん

8

逆ページ版

夏休みがいっぱい

